



西宮渡辺病院は1965年、70床で開設以来、法人の中核施設として機能し続けている。同院は、病院整備事業を通じて拡張を続けており、現在は延床面積7904.07㎡、地上6階・地下1階の建屋を有している。

2019



社会医療法人 **渡邊高記念会**

Cover Story

# 大手医療機器メーカーとの提携により 最新の機器と情報インフラを整備して 地域で完結する医療・介護の実現を目指す

1965年の開設以来、西宮市・芦屋市を中心とする南阪神地域の地域医療を支え続けてきた社会医療法人 渡邊高記念会。現在、西宮渡辺病院、西宮渡辺心臓脳・血管センターを中心に、高度な急性期医療のほか、回復期医療や在宅支援等を展開する。同法人では、都市型の高齢社会進展を受け、急性期医療だけでなく開業医や介護系施設との地域医介連携の充実化を目指している。2018年、その理想の医療環境を実現するべく、シーメンスヘルスケア（以下シーメンス）とのパートナーシップ協定を締結した。佐々木恭子理事長ら、同法人のキーパーソンの方々に、パートナーシップ締結の経緯と目指す医療の方向性を聞いた。

Interview

社会医療法人 渡邊高記念会  
理事長

**佐々木恭子氏に聞く**

——渡邊高記念会の概要と医療圏における位置づけからお聞かせください。

当法人は、1965年に西宮渡辺病院（以下、本院）を、2006年に現在の西宮渡辺心臓脳・血管センター（以下センター）を設立し、以来、西宮市および芦屋市の2市、人口約58万人の地域を主な診療圏として、高い専門性と地域密着型の医療を展開しています。なお、2010年には、西宮渡辺病院が兵庫県初となる社会医療法人の認定を、2017年には西宮渡辺心臓脳・血管センターも同認定を受けていますが、同一医療圏内における2施設の社会医療法人認定は全国初の例であり、両施設が地域で信頼されている証左と言えます。

また、2017年7月には、心臓リハビリテーション専門施設として西宮渡辺心臓リハビリクリニックを、加えて介護医療複合施設として26床の西宮渡辺脳卒中・心臓リハビリテーション病院を開設しました。後者は、血管疾患に特化した特徴的なリハビリテーション専門病院ですが、既に早期脳血管外来リハビリや心臓リハビリの拠点として多くの患者さんが来院されています。

——循環器と脳神経関連領域に関する医療を積極的に展開している理由についてお聞かせください。

当法人の方針は、地域で必要とされている医療を提供し続けることであり、これは開設以来一貫しています。それゆえに、2つの領域に注力するようになりました。しかし、時代によって必要な医療は変化し続けてもいますので、そのアプローチには変化があります。

この地域でも、都市型の高齢化が急速に進んでおり、医療に限らず、早急に様々な課題に対応していかなければなりません。そのためにも、新しい地域コミュニティを再構築しなければならぬ時が迫っていると考えられており、医療もそれに積極的に関与する必要があります。そのところが私たちの責務であり、当法人が存在する意義だと捉えています。

——そのための具体的な方策をお聞かせください。

現在、高齢化の進展によって、循環器領域および脳卒中医療に対する医療、とりわけその分野の急性期医療に対するニーズは高くなっていますが、これらは生活習慣由来であることが特徴です。

つまり、地域性、食生活、ライフスタイル等が患者さんによって各々異なる状況に對して、医療や介護を含めた多職種スタッフがかかわり患者さんの生活を支援する状況を作らないと急性期医療が

成立しなくなってきたのです。そこで、当法人では、さまざまな取り組みを行っています。

その1つが、西宮渡辺脳卒中・心臓リハビリテーション病院の開設です。脳卒中や循環器領域における急性期医療の強化はもちろん重要ですが、その後の医療、すなわち治療後の疾病再発に対する備えも同様に重要です。この地域でも、高齢化の進展に伴って心不全の患者さんが増えているのですが、その診療には急性期だけでなく、心臓リハビリが行える施設が不可欠です。そこで、新たに心臓リハビリ専門の医療施設を開設するに至ったのです。

もう1つが訪問医療の強化です。急性期での治療を終えた患者さんに対しては、退院後の生活を見据えた在宅支援のための設備や地域連携体制の構築が不可欠です。当法人では、移動が困難な、退院さ



**佐々木恭子**（ささき・きょうこ）氏

1981年日本大学医学部卒。同年神戸大学医学部精神科教室入局、1983年西宮渡辺病院勤務。2001年医療法人高明会西宮渡辺病院理事。2010年法人名を医療法人高明会から社会医療法人渡邊高記念会に変更と同時に同法人理事長就任、現在に至る。



したのです。このときに私が学んだのは、高性能なモダリティの導入が、施設が掲げるメッセージを院内外への発信につなげられるということでした。

例えば、本院では2019年にモバイルワークフローCT「SOMATOM go.Top」を導入する予定ですが、この装置が持つキーワードは、低被ばくであり、その発信力を高く評価しています。本院では、CTに整形外科領域の診療や健診等での貢献が求められており、同装置が持つ効率的なワークフローによる検査時間の短縮や、一般のX線撮影と同程度の低被ばく性を、レントゲン程度の被ばくで検査できるCTとしてアピールできます。

さらに、2020年新棟を建設する予定のセンターでは、低侵襲アプローチを行うための血管撮影装置「Artis Qzen」を導入します。この装置導入により、新棟全体で心臓と脳の治療に関する非常に低侵襲な技術を結集する、というメッセージを打ち出すことができます。

——その他、分析装置やITソリューション



2018年6月にオープンした西宮渡辺脳卒中・心臓リハビリテーション病院。26床の同院では、血管疾患に特化したリハビリテーションを提供。2019年2月からはリハビリ専門医によるボトックス外来・装具外来を開始している。



2018年12月から稼働を開始したマンモグラフィ「MAMMOMAT Fusion（シーメンス）」。同装置を活用して低被ばくで安全な健診システムの構築を目指している。

いるところですよ」

「MAMMOMAT Fusion」  
低被ばく・高画質・高スループットで  
健診等スクリーニング検査に貢献

西宮渡辺病院では、高度な画像診断を実施するために、最先端の画像診断装置の導入を進めている。その第1弾が、2018年12月から稼働を開始したデジタル乳房X線撮影装置（マンモグラフィ）「MAMMOMAT Fusion」だ。

同装置は、高性能な間接変換方式フラットパネルディテクタやタングステン陽極を採用したX線管を搭載。最適撮影機能「Op-dose」により、最適な管電圧を被検者ごとの乳房に合わせて自動的に設定し、低被ばく化と高画質化を両立させている。また、マウスをワンクリックするだけで、被検者登録から検査まで自動的に設定できる「One-Click-to-Image」や、スピーディなポジショニングを実現するアイソセントリック機能など、迅速な検査をサポートする機能も多数搭載しているのが特長だ。「最近、患者数が増加傾向にある乳がんの早期発見は、当院における診療の重点項目の1つです。低被ばくであり、また痛み

ンもシーメンス製を導入すると聞いています。

今後は免疫生化学分析装置やITソリューションもシーメンス製の機器・システムを導入する予定です。その理由は、やはり既存装置との親和性もありますが、シーメンスの高い技術力による画像診断・検体検査システムのデータ統合化と地域医療連携ネットワーク構築への期待があります。

加えて、未来に向けて生活習慣病を今後の医療のターゲットとするのであれば、オーダーメイド医療がカギとなります。そのためには個々の患者さんの診療情報を集約し、地域全体で診療情報の共有化を果たさなければなりません。このコンセプトを実現するには、医療機器や情報システムのメーカーが、装置やシステムによってバラバラでは難しいと思うのです。幸い、当法人のシーメンス社に対する信頼ならびに地域医療への思いをシーメンス社にも理解してもらえたことで、2018年11月にパートナーシップを締結することができました。

——法人の今後の展望についてお聞かせください。

センターにおける新棟の竣工は来年5月を予定しています。それが終了したら、次は本院のリハビリ施設の改装や、グループホーム等、高齢者のための施設を本院の近隣に集約化し、現在構想中の地域医療連携ネットワークを活用して、急性期医療から在宅に至るまで、地域で完結する生活支援型医療を展開していきたいと考えています。

を軽減する機能を搭載しているこの装置は被検者に優しく、乳がん検診の受診率向上に大きく貢献してくれるのではないのでしょうか」（佐々木健陽氏）

CT「SOMATOM go.Top」  
低被ばく、造影剤量の半減など、  
高齢者に対する医療に威力を発揮

今後の計画として、西宮渡辺病院では2019年10月頃にシーメンスの最新型モバイルワークフローCT「SOMATOM go.Top」を導入する予定である。同CTは、低被ばくを実現する「Dose Reducation」技術に加えて、管電流を高くしたまままで低管電圧撮影を実施できることにより、造影剤使用量を大幅に低減させることが可能になっている。そして、同CT最大の特長が、本体に付属するCT操作用のタブレット端末だ。被検者登録から画像の確認・転送までの一連の操作を、本体から着脱可能なタブレット端末で行うことができ、結果、検査が容易になるとともに、検査時に被検者への介助ができるなど、安全かつ効率的な検査環境を実現できると期待されている。



モバイルワークフローCT「SOMATOM go.Top（シーメンス）」。CT本体から分離するタブレット端末による操作が可能。被検者・オペレーター双方に優しい検査環境を実現している。

■社会医療法人渡邊高記念会  
高齢患者の機能維持に重点を置いた診療を展開し、  
地域包括ケア・生活支援型医療の要の役割を果たす

Interview  
社会医療法人渡邊高記念会 副理事長  
西宮渡辺病院 院長

佐々木健陽氏に聞く



佐々木健陽氏  
(ささき・たけはる)

1980年大阪市立大学医学部卒。同年同大学整形外科教室入局。1989年医療法人高明会西宮渡辺病院整形外科部長、2013年より現職。

1965年に開設された西宮渡辺病院は、社会医療法人渡邊高記念会の中核施設である。同院は病床数184床。地域包括ケア病床49床、回復期リハビリテーション病床40床を有する他、西宮人工関節センターも併設する。また、それに加えて中央在宅療養相談支援センターも組織しており、2018年からは在宅支援病院として訪問医療を実施している。

今後、同院が目指す方向性について、同法人副理事長で同院院長の佐々木健陽氏は、つぎのように話す。

「当法人は、都市型の高齢化が進む中で、

「当院では、整形外科における骨しょう症の検査や、呼吸器領域における慢性呼吸器不全、肺がん等の検査体制を強化しています。そのため、高齢者に優しい検査環境を提供すると同時に、低線量での撮影とDual Energy CT検査が重要となります。それらを全て実現してくれる「SOMATOM go.Top」には、大いに期待しています」（佐々木健陽氏）

患者・職員の満足度向上  
最先端の機器・システム導入で  
患者満足度と職員の育成を図る

同院では、さらに免疫生化学統合分析装置「Atellica Solution」を導入し、迅速・正確・簡便な免疫・生化学検査の実施を目指す。また、試薬管理の自動化を進めるとともに、画像診断と検体検査システムのデータ統合化も推進する計画がある。「最先端の機器やシステムを導入することで法人内の各施設の専門性が高まり、それが結果として患者満足度の向上につながります。また、若手スタッフのモチベーションを高め、彼らを育てていくためにも重要な役割を果たします。当法人が、積極的に投資を続ける理由がここにありま

地域医療連携  
地域医療ネットワークを形成し  
地域に根差したトータルケアを追求

同法人では、地域の開業医や在宅介護支援センター、訪問看護ステーションなどと情報ネットワークを形成し、急性期から在宅医療までを1本の線で結びつけ、こ

医療・介護・在宅支援・リハビリ等、生活支援を加えた包括的な医療を展開しています。生命に関わる重篤な急性期疾患への対応は最新設備を有する西宮渡辺心臓・血管センターが担当するのに対し、当院は壮年期・老年期を中心に、機能維持に関わる疾患への対応を担っています。当院では、生死に直結するような医療には直接関係しなくとも、患者さんが社会的に楽しく生きられるように導く医療機関でありたいと考えています。

特に、高齢の患者さんに対しては、骨折、運動疾患、消化器不全、呼吸器疾患、精神疾患など、病気や怪我によって低下した機能を、どう復活させ、維持していくかということに注力しています。

機能維持とは、患者さんが楽しく生きていくためのニーズを満たして、元気に生きられることだと考えています。そのために当院では、肉体的・精神的・時間的なストレス等の患者負担を減らすこと、健診や外来診療を通じて疾病を早期に見つけることに重点を置いて診療に取り組んでいます。

特に健診では、整形外科における骨粗しょう症、消化器がんや乳がん、慢性呼吸器不全や肺がんの早期発見等に努めています。これらを実現するためには、高性能な画像診断装置が不可欠です。今回のシーメンスヘルスケアとのパートナーシップ契約では、その点で大いに期待している。

「昔と異なり、がんや脳卒中、循環器疾患の多くは、生活習慣が由来となってきました。そのため当院では、治す、臨床ばかりでなく、病気になるための啓発活動にも力を入れているところです。

具体的に言えば、院内で毎月第2水曜日に開催している健康講座や、地域の公民館や老人会等で生活習慣病予防のための講演会を実施しています。

また、住民の方々だけでなく、地域で完結した医療を実現するためには、地域の開業医の先生方の協力も欠かせないの、は言うまでもありません。当法人では、地域医療連携フォーラムを定期的に開催するなどして交流を深め、地元住民一人ひとりの状況把握と診療情報を地域で共有することを実現し、オーダーメイド医療の確立とその実践・追求をしていきたいと考えています」



免疫生化学統合分析装置「Atellica Solution（シーメンス）」。自動化技術を積極的に取り入れ、迅速・正確・簡便な検査を実現。多彩なユニット構成により、病院環境に適応した検査環境を構築できる。



■西宮渡辺心臓脳・血管センター  
循環器疾患・脳血管疾患に重点を置いた急性期医療を実施  
新棟を建設して、最先端の高度医療に適応した環境を構築

Interview  
西宮渡辺心臓脳・血管センター  
院長代理兼センター長



民田浩一（たみた・こういち）氏

1996 年滋賀医科大学卒。神戸市立中央市民病院 循環器内科副院長を経て 2009 年西宮渡辺心臓・血管センター循環器内科部長、2016 年同センター副院長、2018 年より現職。

2006 年に開設された西宮渡辺心臓・血管センターは、かねてよりその名が知られていたが、2018 年には「西宮渡辺心臓脳・血管センター」と名称を改め、さらに広く、南阪神地域における心臓・脳血管診療の中心的な病院として、その評価を高めている。

病床数は108床。そのうち ICU 12床、SCU9床、HCU8床を有するほか、デュアルソースCT「SOMATOM Force」や3テスラMRI「MAGNETOM Skyra」、ハイブリッド手術室対応の血管撮影装置「 Artis zee ceiling+TRUMPF」など、先進的な高性能モダリティを多数稼働させているのが特徴的だ。また、救急患者の救命率および救急隊の活動レベル向上に寄与するラピッドレスポンスカー

を導入・運用するなど、大学病院に匹敵するほどの高度で専門的な治療を展開している。今後、同センターが目指す方向性を、同センター 院長代理兼センター長の民田浩一氏は、つぎのように話す。

「脳血管や心血管疾患における急性期医療は、当センター開設以来、最も力を入れてきた分野です。しかし、現在の日本において、この急性期後の患者さんへのフォローは決して十分とは言えないのが現状です。急性期の治療を終えた患者さんにとって、脳卒中や心不全の再発予防など、生活改善によって重症化を防ぐことは極めて重要なのです。

そこで、我々は急性期だけでなく、慢性期、維持期、疾病管理を法人全体でできる仕組みを作り上げようと考えました。当然、当法人だけでは難しいので、地域の開業医の先生方や訪問看護ステーションのスタッフ、ケアマネージャーといった、地域で患者さんを見守る方々との連携強化が重要となりますが、現在の体制では診療情報を共有することは困難と言わざるを得ません。このような現状を打破するには、効率的な医療ITが不可欠です。今回、当法人はシーメンズとパートナーシップを結びましたが、同社が持つ優れた診療情報統合管理システムやテレビ会議のようなオンライン化による双方向会議システムを活用し、新しい地域医療ネットワークを構築することを計画しています」

新棟建設  
2020年夏の本格稼働を目指し、最新の機器・システムを導入予定

同センターでは、2020年夏までに北側の駐車場跡地を活用し、地上7階建ての新棟を建設する予定だ。新棟には、64列CT「SOMATOM Perspective」やアブレーション治療専用室に設置予定の血管撮影装置「Artis Qzen」を中心に、心臓エコー室6室を設置し、最新の運動負荷心エコー検査を実施するなど、高度な

Interview  
社会医療法人 渡邊高記念会  
法人本部  
副本部長  
ふじわら・しんご  
藤原新吾氏に聞く



——渡邊高記念会での最近のトピックについてお聞かせください。

2018 年度の大きなトピックとして、まず6月に西宮渡辺脳卒中・心臓リハビリテーション病院を開設したことが挙げられます。

心臓リハビリテーションは、心不全の患者さんの方々にとって重要な診療ですが、整形領域におけるリハビリに比べて離脱率が高いのが課題でした。そこで、当施設では個別対応による患者さんの送迎を実施し、離脱率を抑える取り組みを実施しています。これは、病院経営上も重要な取り組みです。せっかくリハビリ治療のための準備をしても、来院する患者さんが少なれば経営計画が立てられません。多少、利益は減りますが、来院率を9割まで持っていければ、

病院経営を安定させることができます。送迎のためのスタッフは、西宮渡辺心臓脳・血管センターのラピッドレスポンスカーのスタッフに対応してもらうなど、できる限り効率的な人的リソースの活用を心がけているところです。なお、現在、送迎車は大型バスを含め、10台が稼働しています。

また、同年11月にはシーメンズと地域医療連携の発展を目指すパートナーシップを締結したことは、ほかの先生方も語られているとおりです。

——来年度以降の計画についてお聞かせください。

西宮渡辺心臓脳・血管センターの新棟開設や西宮渡辺病院でのモダリティおよび検査室体制の拡充、既存 PACS 更新に合わせた地域医療ネットワーク構築などを計画しています。シーメンズとのパートナーシップが、これらの新規事業に大いに貢献してくれることを期待しています。

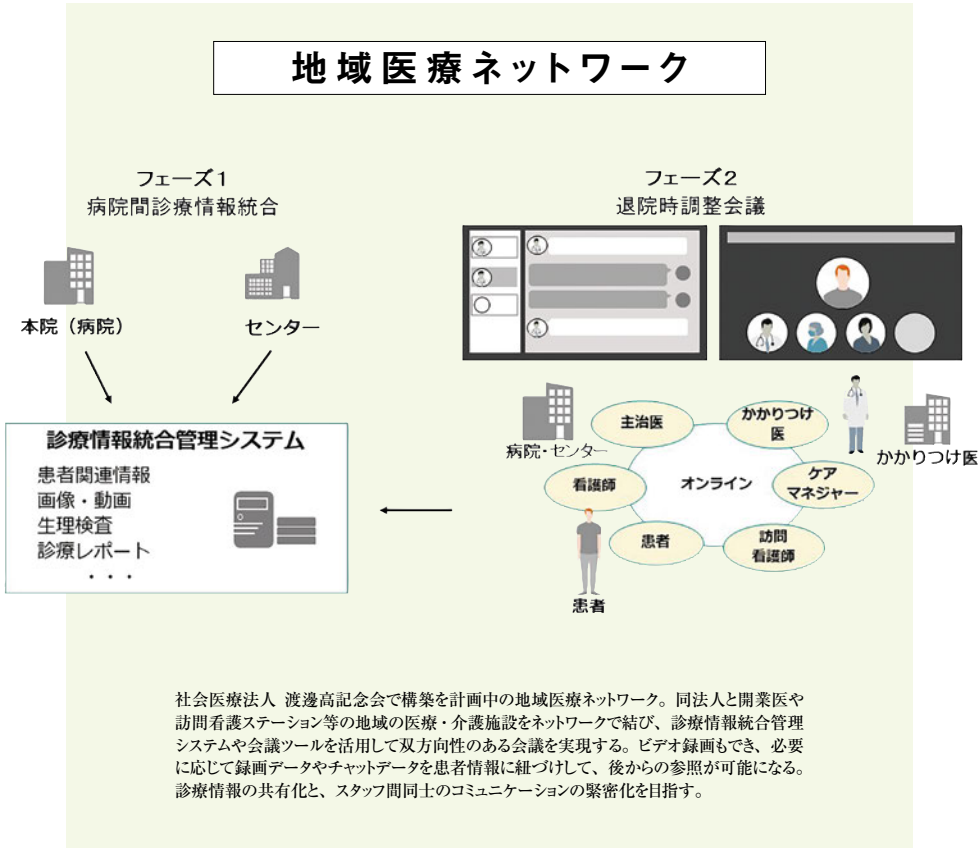
医療の提供を目指すという。

新棟の構想について、民田氏はつぎのように話す。

「当センターでは、すでに心臓を高速撮影できるデュアルソースCT「SOMATOM Force」が稼働していますが、患者さんの多くは脳と心臓領域以外にも多様な疾患を抱えています。当院に患者さんを紹介してくださる開業医の先生方からも、脳や心臓ばかりでなく、一般的な腹部や胸部の検査を行ってほしいという希望も多いことから、そのような要望に応えられる汎用型の高スペックCTとして「SOMATOM Perspective」の導入を決定しました」

また、新棟にはアブレーション専用の血管撮影室を開設する予定である。同室に導入を予定しているのが、シーメンズ製の血管撮影装置「Artis Qzen」である。長時間のX線透視が必要な心房細動アブレーションでも、高いイメージクオリティと被ばく低減を両立するX線管「GIGALIX」、新素材を採用して低線量でも高画質を実現するフラットパネル「Zen ディテクタ」等によって、従来装置に比べ、より低被ばく下での運用が可能となっている。

「高齢化社会の進展もあって、心房細動の患者数が増えているのは間違いありません



「私たちは、シーメンズが中心となるチャット機能やオンライン／オフラインで使用できる会議ツールといったITソリューションを最大限に活用し、地域の多職種間連携をより強固にする地域医療ネットワークを実現したいと考えています。

このシステムを活用すれば、例えば在宅患者の最新の様子を開業医やケアマネージャー、そして当センターの職員など患者さんに関わるスタッフ全員が把握で

ん。そこで当センターでも、アブレーション専門の設備を開設することにしたのです。「Artis Qzen」は、アブレーションや小児検査でその実力を発揮する低被ばく血管撮影装置です。アブレーションでは、被ばく量を減らして患者さんへの侵襲を極力少なくしなければなりませんので、新しい装置には期待するばかりです」

新棟には、前掲の施設以外にも疾病予防運動施設を拡充するなどして、保険診療後に運動療法やリハビリを継続したい患者さんに対応したい考えだ。加えて、新棟の建設に合わせて、先述した双方向会議システムを構築したいと民田氏は話す。

「この10年間で、急性期の治療だけでは完治しない患者さんが増えました。当法人の施設だけで治療を完結することは困難ですので、先述した情報連携ネットワークを構築、活用して、ケアマネージャーや開業医の先生方ら、地域の力を借りて、地域完結型の医療を展開したいと考えています。また、逆に地域の医療関係者の皆さんには、ぜひ当法人の施設やシステムを積極的に活用していただきたいですね」



64 列 MSCT「SOMATOM Perspective（シーメンズ）」。コストパフォーマンスに優れ、コンパクトながら高画質・低被ばくを実現した高性能装置。Dual Energy Imaging にも対応しており、被検者に優しい検査環境を提供する。



長時間の被ばくを余儀なくされるアブレーション治療や小児循環器検査等を目的とした血管撮影装置「Artis Qzen（シーメンズ）」。高性能な X 線管とフラットパネルを搭載し、優れたアプリケーションと相まって、高品質な画像を描出しながら、低被ばくを実現した装置として高い評価を受けている。